

## 幼児のアニミズムについて

小林 勝年\*, 石田 航\*\*, 松井 恵美\*\*, 渡辺 瑞貴\*\*, 徳田 憲生\*\*

### A study on animism in preschool children's thought

KOBAYASHI Katutoshi\*, ISHIDA Wataru\*\*,  
MATUI Megumi\*\*, WATANABE Mizuki\*\*,  
TOKUDA Norio\*\*

鳥取大学生涯教育総合センター\*, 鳥取県立保育専門学院\*\*

キーワード：アニミズム, ピアジェ, 素朴生物学

#### 1. 問 題

2004年6月佐世保市内で小学6年生が同級生にカッターナイフで切られ死亡するという事件が起こった。その後長崎県教育委員会(2005)は加害児童が「自己の経験や共感に基づいた死のイメージ」が希薄である点を憂い、市内の小学4・6年, 中学2年合計3611名を対象に大規模なアンケート調査を実施した。これをみると「死んだ人が生き返る」と答えた子どもが小学校4年で14.7%, 小学校6年で13.1%, 中学校2年で18.5%, 全体で15.4%と1割以上の子どもが人の死を不可逆的現象として捉えていないことがわかった。また理由を尋ねると①生き返る話を聞いたことがあるから(49.3%)②テレビや映画等で生き返るところを見たことがあるから(29.2%)③ゲームでリセットできるから(7.2%)という理由が挙げられた。もちろんこの中には生き返り願望も含まれていたわけだが社会文化的な制約(Vygotsky, 1978)からの影響は無視できない。ゲームやテレビで人の生死が簡単に語られたり, 病院という限られた空間でしか死との向かい合うことが少なくなってきた現代において子ども達はどのように人の生死を理解しているのだろうか。

Piaget (1955) は子どもの世界観を形成している認識様式は「实在論」, 「アニミズム」, 「人工論」であるとし, 抽象的・科学的な認識の獲得に伴いそうした子ども特有の認識が減少していくとした。また幼児期を代表する心理特性の一つに自己中心性(後の著作において「中心性」と呼びかえられている)を挙げたが, 自己中心性とは自己が自己として定立していない状態なので, 外界を自己が支配するものとしての「实在論」, 外界における自己の過般化としての「アニミズム」が観察されるとした。そして物に付与される意識と自己意識の過般化としてのアニミズムの特徴をTable 1のようにまとめた。

第1段階においてはすべての物に「生命」を見出ししていくがそれは自分の生活にとって有用な場面や自分との関与によって意識化される。言わば, 自分に役立つものこそ生命を持つというような捉え方を呼ぶわけだがこれは視点を変えると生と死の不分離が前提となる。何故なら子どもは両者を区別するための基準を持ち合わせていないからこそ外界との混同心性において自己の意識されたものが「生命」として浮かび出されるからである。例えば「ろうそくは燃えている時は生きているが消えてしまうと生きていない」と話した子どもや「石は普段は生きて

いないが投げる時は生きている」と判断した子どもの例がそれに当たる。混同性に導く分離は身体的な水準，自他の水準，外界の物事との水準など様々な水準で表れるが実在論や魔術的思考とも相まって根強く子どもの心を支配することとなる。

次に，第2段階においては「動く」という基準が設定されて外界を認識するようになり「動くものは生きている」という認識が定立されるとした。Baron-Cohen (1995) は「心の理論」獲得以前の段階として意図検出器 (Intentionality Detector) の出現に注目したが，「生命ー動く」という対図式が「動くー人ー心」として発展しながらもアニミズムを豊かにしていく。しかしこの段階においては，いかなる派生的表現も「動くこと」に中心化された生命観の表れとして説明される。

第3段階は「動く」ことへの発展的認識として生命現象を自発的運動に限定して捉えられていくようになるとした。以前は「ペダルが動いていたので自転車は生きていた」と答えていたが，この段階になるとその運動の原因に言及してくる。「テーブルを刺したらテーブルが痛みを感じないのはそれが人間ではないから」とか「もし生きているなら思うままに行ったり来たりすることができるのにそれができないから雲は生きていない」と説明を加えた子ども達の例がそれに当たる。Premack (1990) は乳児の段階でもそうした知覚が可能であるとしたが，運動の起源が生命かそうでないかという基準に加わるとPiagetは説明したのである。

最後に，第4段階においては自己運動に同一視された生命観が植物と動物の意識性の弁別認識を触発し最終的に生物の下位カテゴリー，すなわち動物と植物を含む科学的な生物概念を生むとした。

しかし，それぞれの段階間の移行がどのように行われていくのかについては十分な説明は見あたらない。そもそも生物学が有する科学的な認識の獲得によって子どもの精神世界からアニミズム的思考が一掃されると考えるのは果たして妥当なのだろうか。「生きている」ことを問うことは死との相違を説明できる能力の発達過程を分析することにも通じていくが，この場合自己認識の発達とどのように関連していくのだろうか。自分にとって有用的かどうか，そのものが動くかどうかーそれ以外に子ども達は生命を考える軸を持たないのであろうか。そこで，本研究においては先のPiagetのモデルをもとに子どもにおけるアニミズム的思考について臨床発達の検討することを目的とした。

Table 1 物に付与される意識と生物的概念の発達段階

発達段階	年齢(歳)	特徴	観察された例
第1段階	4～6	全ての物に心があり，特に有用な物こそ生きていると考える	・ろうそくは光を与える時だけ生きている ・石を投げる時，石は生きている
第2段階	6～9	すべて動く物にだけ，心があり，生きていると考える	・雲，水，自転車は動くから生きている ・テーブル，山は動かないので生きていない
第3段階	8～12	すべて自分の力で動く物にだけ，心があり生きていると考える	・自転車を走らせるのは私だから生きていない ・風は雨を動かすので生きていない
第4段階	11～	動物にだけ心があると考える。動物・植物のみ生きていると考える	・太陽，月，風は感じるができないので生きていない ・植物，動物，人々，虫は感じるできるので生きている

## 2. 方 法

### (1) 対象児

鳥取県内の保育所に通う幼児107人。年齢の内訳は3歳-17名, 4歳-28名, 5歳-30名, 6歳-32名であった。

### (2) 手続き

保育所の日課で自由遊びの時間に個別で面接を行なった。時間は特に制限することなくゆったりとした雰囲気で行った。被面接児には十分なラポートをとり「これから質問することは、正しい答えはありません。あなたの考えていることを自由に話してください」と告げ以下のような質問をした。

- ① ( ) は生きていますか?
- ② ( ) は食べますか?
- ③ ( ) は痛がりますか?
- ④人は誰でも死にますか? 死なない人もいますか?

そして、問①については下された判断の内容にかかわらず各々の対象物についてその理由についても尋ねた。質問中、考え込んでしまったり回答を迷っているような時には、こちらから暗示になるような言葉かけは一切行わず、その子どもの持つ独自の考えが表現されるように配慮した。また、面接中において「命」が概念を表す言葉であるのに対し「生きている」は状態を表す言葉であるため、子どもにとっての理解を容易にするためにも「生きている」という表現を統一して用いることにした。加えて、「死んでいる」という言葉は、それが「生きていた」ことを前提としてしまうため「生きているか・生きていないか」を用いることとした。更に、質問の対象物に関しては実物を用意しそれを見せながら和やかに質問を行うこととした。

### (3) 対象物

「生きているか どうか」について尋ねる対象物は以下のものを用意した。

- ・人 (生物の代表)
- ・時計 (人工物で動くもの)
- ・木 (生物だが動きが目に見えない, 変化するもの)
- ・落ち葉 (生きているものの一部だったもの)
- ・雲 (自然物で動き, 変化が見られるが生きていないもの)
- ・ぬいぐるみ人形 (形態が人間に似ているもの)
- ・水 (様々に変化を見せるもの)
- ・石 (無生物の代表)

### (4) 質問構成

質問は上記に挙げた4つを用意したが問①はアニミズム思考の実態を問②は生命活動との関連を問③は心すなわち精神活動との関連を検討するために設定した。また問④は水谷(2004)を参考にしながら、加齢に伴い生物・無生物の区別がつくようになりアニミズムから生物学的概念へと移行していくとされているが、それは同時に「生きている」ことと「命」の概念への統合化が図られ命の有限性への認識を促すという理解を検証するために設けた。

### 3. 結果と考察

#### (1) 対象別アニミズム傾向の年齢的推移

各対象毎に、「生きている」と答えた子どもの割合を年齢別に示したものがFig. 1, 各年齢毎に「生きている」と答えた対象を上位から並べたものがTable 2である。また各自が答えた判断(「生きている」あるいは「生きていない」と答えたことの)の理由として述べられた内容を各対象毎に年齢別に多いものから2つを抜き出しまとめたものがTable 3である。(尚, 割合はいずれも小数点以下を四捨五入して算出した)

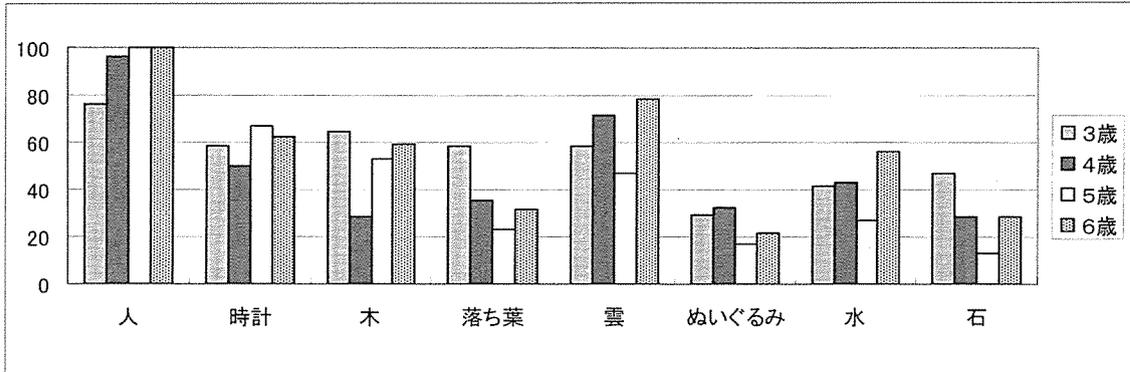


Fig. 1 対象別アニミズム傾向の年齢的推移

Table 2 各年齢別・アニミズム傾向の高い対象物

3歳	人	木	時計・落ち葉・雲			石	水	ぬいぐるみ
	76%	65%	59%			47%	41%	29%
4歳	人	雲	時計	水	落ち葉	ぬいぐるみ	石・木	
	96%	71%	50%	43%	36%	32%	29%	
5歳	人	時計	木	雲	水	落ち葉	ぬいぐるみ	石
	100%	67%	53%	47%	27%	23%	17%	13%
6歳	人	雲	時計	木	水	落ち葉	石	ぬいぐるみ
	100%	78%	63%	59%	56%	31%	28%	22%

Table 3 「生きている」・「生きていない」の主な理由（各対象、各年齢毎上位2つ）

年齢	項目	生きている理由				生きていない理由			
		1位	人数	2位	人数	1位	人数	2位	人数
3歳	人	わからない	8人	食べる・飲む	4人	わからない	3人		人
	時計	わからない	8人	時間が来る	1人	わからない	5人	ただ動くだけ	2人
	木	わからない	6人	葉っぱが出る	1人	わからない	4人	目に刺さる	1人
	落ち葉	わからない	5人	青い	1人	わからない	4人		人
	雲	わからない	4人	空が見える	1人	わからない	3人	高いところにある	1人
	ぬいぐるみ	わからない	3人		人	わからない	7人	生きていない	2人
	水	わからない	2人	ジャーっと出る	1人	わからない	7人	ばい菌が入っている	1人
	石	わからない	5人	固い	1人	わからない	6人	疲れた	1人
4歳	人	動く	5人	わからない	5人	生きていたら死ぬ	1人		人
	時計	動く	11人	わからない	3人	わからない	2人	中に時計が入っている	1人
	木	(風等で) 動く	2人	芽が生えてくる	1人	動かない	4人	分からない	4人
	落ち葉	風が吹いたら飛ぶ	4人	木になっている	2人	動かない	5人	穴が開いている	2人
	雲	動く	6人	わからない	3人	わからない	2人	動いていない	1人
	ぬいぐるみ	動くかもしれない	1人	元気	1人	動かない	3人	わからない	3人
	水	ジャーっと出る	4人	魚がいる	2人	動かない	3人	わからない	3人
	石	固い	2人	転がる	1人	動かない	4人	わからない	4人
5歳	人	わからない	7人	動く	5人		人		人
	時計	動く	12人	わからない	6人	電池で動いてるだけ	3人	手足目がない	3人
	木	わからない	8人	水を飲む	4人	わからない	4人	動かない	2人
	落ち葉	落ちる	2人	緑の葉は生きてる	2人	わからない	10人	茶色は生きてない	3人
	雲	動く	7人	わからない	4人	くっついている	2人	浮かんでいるだけ	1人
	ぬいぐるみ	わからない	2人	動く時は生きてる	1人	わからない	6人	動かない	5人
	水	出る(動く)	3人	テレビで顔があった	1人	わからない	4人	つめたい	1人
	石	心がある	1人	固い	1人	わからない	6人	動かない	5人
6歳	人	動く	7人	わからない	5人		人		人
	時計	動く	13人	わからない	3人	わからない	5人	電池で動くだけ	1人
	木	わからない	6人	大きくなる	4人	わからない	6人	動かない	3人
	落ち葉	自然にある	1人	色が変わる	1人	動かない	6人	破ける・枯れている	3人
	雲	動く	16人	わからない	4人	わからない	4人	黒い雲は生きてない	1人
	ぬいぐるみ	夜中にちょっと動く	1人	テレビで動いていた	1人	動かない	11人	わからない	2人
	水	わからない	4人	動く(流れる・出る)	3人	わからない	3人	動かない	2人
	石	わからない	1人	地震で動く	1人	動かない	6人	わからない	7人

これを見ると先ず「人」については3歳児では76%、4歳児で96%、5歳児で100%、6歳児で100%の子どもが「人は生きている」と認識しており加齢に伴い安定した認識となる。「人が生きている」という認識はほぼ4歳頃に完成されると言えよう。ここで、3歳児の24%が「人は生きていない」と答えたのは混同心性による表現として解釈できる一方、Table 3の結果より「生きている」・「生きていない」双方において「わからない」が上位を占めていたことから「人」や「生きている」という言葉の意味が十分に理解できず答えたために生じた反応としての解釈も許した。このことは改めて言語反応は理解と表現を含めた言語能力に負うところが多いことを示唆しPiagetが用いた臨床面接法の下限年齢が3～4歳であることを確認させた。

次に、生物である「木」は「生きている」と答えた割合が3歳児で65%と「人」に次ぐ高い数値を示していたにもかかわらず4歳児では29%と急に落ち込み、5歳児で53%、6歳児で59%を示した。そこでTable 3に示された理由を調べてみると3歳、5歳、6歳の子どもでは生死の理由として双方とも「わからない」が最も多いのに対して4歳児のみ「動く」・「動かない」が「生きている」・「生きていない」という判断に結びついていたことから「動かない性質を持つ生物」としての気づきがこの年齢に特徴的であったと分析された。また4歳児の理由反応として「芽が生えてくるから生きている」と述べた子どもがいたが、文字通り生物学の基礎としての「植物—成長—命」という図式がこの年齢でも生じることを示した。

「落ち葉」も3歳児で59%、4歳児で32%、5歳児で23%、6歳児で31%と「木」と同様な傾向を示したが、3歳では同水準であったものの5・6歳では「生きている」と判断している子どもの割合が半減したことが特徴的であった。そこでこの理由を探るためにTable 3に示された理由を分析してみると「緑・青—生きている」、「茶色—生きていない」という色による生命観や「破れる、枯れる、穴があいている—生きていない」という形態的な生命観が幅広い年齢で観察されていることがわかった。先に挙げた成長と関連づけられた生命観、色による生命観、形態による生命観など様々な視点を備えた生命観が5・6歳頃に凝集されてくると考えるならばこの年齢において「落ち葉を生きていない」と考える割合が増えるのは当然だろう。

「雲」は自然物で動き、変化が見られるが生きていない。しかし3歳児で59%、4歳児で71%、5歳児で47%、6歳児で78%と全般的に加齢に伴って増加する傾向にありどの年齢においても高いアニミズム思考が認められた。特に6歳児では非常に高いアニミズム傾向が示されたわけだが、Table 3に示されたようにその理由は「動く」からに他ならない。しかしながら4歳以降の子どもは「雲が生きている」のは「動く」からであり「生きていない」のは「動かない・浮かんでいるだけ」なのだが、3歳児の理由は若干異なる。すなわち「空が見えている」から雲は「生きている」のであり「高いところにある」から雲は「生きていない」と言う。これは外界と自己の融即 (Wallon, 1983) を想定させる。「生きている」とは「見える」ことであり「知る」、「感じる」など自己の精神作用を招くものでなければならないとしたのである。ここで3歳では自己の精神作用を呼びかけることに「生命」を見出そうとするのに対して4歳以降の幼児は自己の精神作用とは距離を置いたところで雲自身の「動き」に生命を感じていることが分かる。そしてその生命観は雲の動きにアフォード (Gibson, 1950) されて発見された認識であったと言えよう。その意味で「見る」・「知る」を自覚的に捉える能力が生命観という新しい価値を獲得させるには前提とされなければならない。またそれは発見であると同時に意識化であるからいつでも融即的な認識に引き戻される。石川啄木は「雲は天才である」と表したがそれはまさに彼がそうであったからに他ならない。大人が雲に自分の気持ちを反映させる

ことはまさにそうした精神状況なのであり、投影法の原理はまさにここに存在する。

「ぬいぐるみ人形」は形態が人間に似ているもので保育所での生活において保育士がしばしば「生きている」かのように扱ったり子どものアニミズム思考を触発するような声かけをしながら活用されることが多い。しかし3歳児で29%、4歳児で32%、5歳児で17%、6歳児で22%と全般的に他の対象物よりアニミズム的思考を喚起することが少なかった。無生物で動かない「石」より3歳・6歳においては「生きていない」と見なしている子どもの割合が多かった。そこで、Table 3よりその理由を分析してみると形態としては人間に近くても「動く」ことをしない「人形」は単なる置き物で「生き物」としては感じられないという反応が多いということが分かった。その意味で人形に「生命」を注入するのは大人なのだろう。

「水」は様々に変化を見せる物質であるが3歳児で41%、4歳児で43%、5歳児で27%、6歳児で56%と「雲」と同じような年齢的推移を示した。理由においても「動く」ことが基準となっていたが、蛇口をひねることでその動き・変化をコントロールできるという意味から、どの年齢においても「雲」に対して抱いたアニミズム的思考の水準を下回った。これによってPiagetは動きの原因への気づきを第3段階に設けたが対象物によってもそうしたことの気づきはかなり低い段階で現れることが推測された。

「石」は動かない無生物であるが3歳児で47%、4歳児で29%、5歳児で13%、6歳児で28%の子どもが「生きている」と答えた。加齢に伴い全般に減少していく傾向にあったがTable 3の理由より「固い」、「転がる」という素材や性質を「生きている」ことの理由として挙げた子どももいた。「生きている」ことの理由はまさに多様な視点から構成されているのだと考えられた。

最後に、人工物ではあるが動くものとして「時計」の反応を見てみると3歳児で59%、4歳児で50%、5歳児で67%、6歳児で63%と年齢的な差異が比較的少なくかなり高い割合でアニミズム的思考を引き出していることがわかった。またこの結果は4歳以降「動く」－「生きている」、「動かない」－「生きていない」の図式的理解が支配的であることを裏づけるものとなった。しかし「動く」ことから判断するその思考特性は「動く」ことが「生きていない」理由になることにも結びつけられた。いわゆるPiagetが第3段階として特徴づけた、その動きが自発的かどうかという点に着目できるようになった場合であるが、「電池で動いているので生きていない」という理由は5歳頃から出現した。

## (2) アニミズムと精神活動・生命活動の理解との関連

各対象物に対して精神活動として「痛がる」と答えた子どもの割合を示したものがFig. 2、生命活動として「食べる」と答えた子どもの割合を示したものがFig. 3である。

先ずFig. 1とFig. 2を比較してみると、「時計」、「雲」、「石」における年齢的变化がほぼ一致していることがわかる。このことはアニミズム的思考と精神活動としての「痛み」への理解に何らかの関連があることを予測させた。また3歳児において「ぬいぐるみ」91%、「石」82%、「木」82%などかなり高い割合で「痛がる」と答えていたのは主観の過般化あるいは「同一視」が行われたものと解釈できる。そして加齢に伴いその割合が減っていくのは物の属性理解が進んだことに起因した現象とみられるが、6歳児においても時計・木55%、雲50%、石45%が「痛がる」と答えている点はそれらとは異なる発達－すなわち「生きている」という概念で括られた認識の拡張と推測される。すなわちPiagetは科学的概念が主観の拡張を遮りアニ

ミズムは言わば科学的知識の欠損を補償するための因果的必要性から生じたと捉えたが、この考えでは6歳というある程度事物の特性が把握できる年齢において人間と同じような精神活動を適用する現象は説明できない。意味を拡張しそれを外界の事物に向けて自由に適用する態度こそ文学的知識の発生的起源と呼べよう。

次に生命活動としての「食べる」ということとアニミズム的思考との関連について見てみると6歳では木41%を除いて生命活動をほとんど認めなかった。しかし3歳では時計54%、落ち葉62%、石46%と無機物や人工物に対しても生命活動を当てはめて理解している傾向が強いことがわかった。

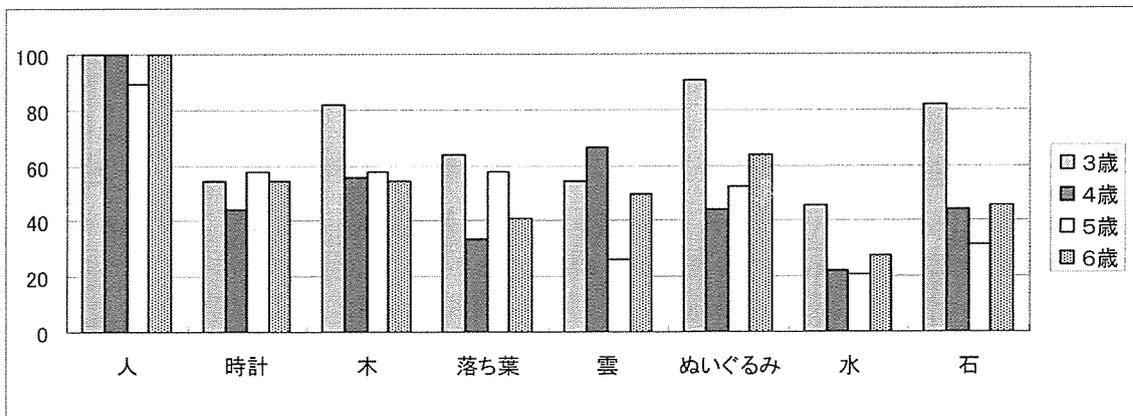


Fig. 2 「痛がる」という精神活動を認めた割合

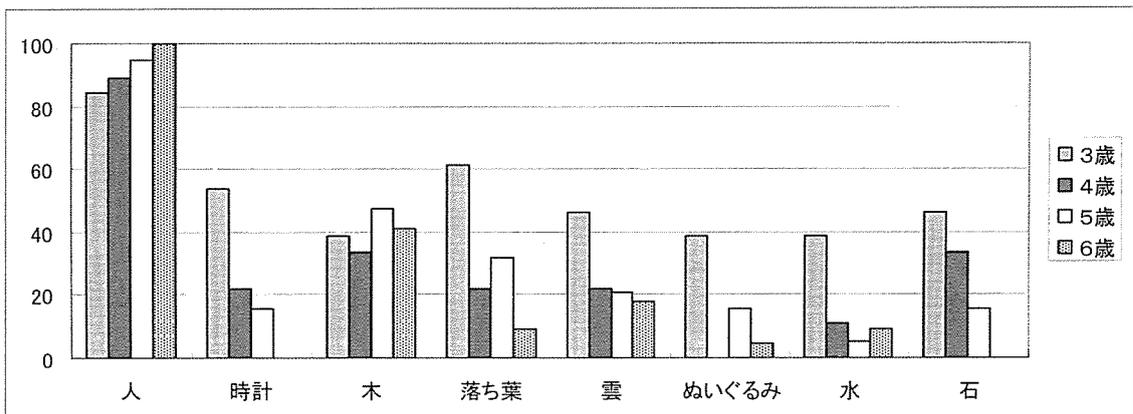


Fig. 3 「食べる」という生命活動を認めた割合

### (3) アニミズム傾向と命の有限性の認識について

「人は誰でも死にますか？ 死なない人もいますか？」という質問に対する回答内容を年齢毎に示したものがFig. 4である。3歳では「死なない人もいます」が59%、「誰でも死ぬ」が0%、4歳児では「死なない人もいます」が69%、「誰でも死ぬ」が22%、5歳児では「死なない人もいます」が69%、「誰でも死ぬ」が28%、6歳児では「死なない人もいます」が50%、「誰でも死ぬ」が47%であった。またこの問いに対して「分からない」と反応した割合は加齢と共に減少していた。そして6歳で判断を保留することなく、「死なない人もいます」と「誰でも死ぬ」と判断した子どもがほぼ半数に達した。水谷（2004）は絵本を題材にしたがこれと同様な問いを幼児・児童にしているが4・5歳児で「生き返る」50.00%、「生き返らない」46.15%、

小学2年生で「生き返る」30.65%、「生き返らない」67.74%と6歳前後に命の有限性についての半信半疑性が認められことを示している。Nagy (1948) は5歳以下の子どもは死の中に生を見、死を取り返しのつかないことと受けとめていないと指摘したが、生命の有限性への認識は有限性を超越する「希望」を生み、生まれ変わり思想を抱かせる。その意味で結局生命とは死と隣り合わせの現象であることを考えれば、素朴生物学の原型をこの年齢段階に求めてもよからう。

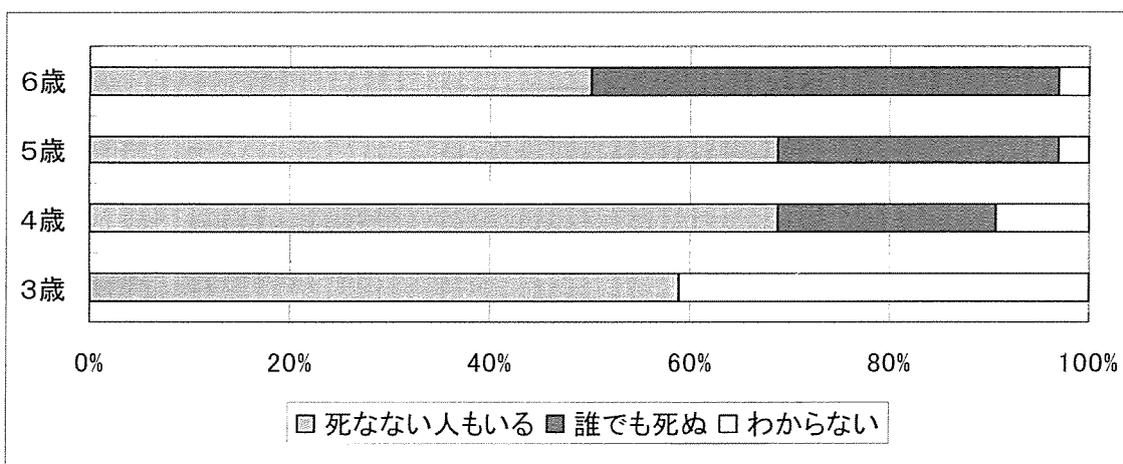


Fig. 4 生命の有限性についての認識

#### (4) 心の理論とアニミズムの関連

Carey (1985) は素朴生物学は独立した領域として存在せず素朴心理学から分化したと説くが、この時素朴心理学の定義を確認しておくことが必要となる。何故なら幼児において文字通り心の問題が生物理解を助け生物理解の変化が自己を捉え直させてくれるからである。心は容易に物質に還元されることなく多様に現象化するからこそ簡単には定義できない。ましてや理解の出発点として何を基礎に置くかは大きく議論の分かれるところなのである。そこで、子どもの面接記録から心をキーワードに答えてくれた幾つかの反応を以下に示し、分析する。

##### 〈5歳男児〉

一時計は生きている？—生きているよ—どうして生きているって思う？—心がなくなると動かなくなるから—落ち葉は生きている？—生きているよ—どうして生きてる？—心が生きてるよって教えてくれる—（その後同様の質問全てに、「生きている。心があるから」と答える）—じゃあ、生きているってどういうこと？—心があるってこと—あのドアも？—生きてる。心があるから—じゃあ、ドアを叩いたら、ドアは「痛い」って思うかな？—思うよ—床は？—床も痛いって思うけど、床は我慢強いから痛いって言わない—じゃあ、みんな生きてるんだ？—うん。でもノートは生きてない—なぜ？—ノートが生きてたらどこかに行っちゃうから（困った表情をして）

本児は一貫して「生きている」ことは「心がある」と説明しすべての物に心があり「生きている」と見なそうと努める。しかしその一方で、お気に入りのノートに関してだけは無くなっては困るので「生きていない」と主張した。こうした自己中心的なアニミズムは、Piagetがアニミズム的思考の発達について分類したモデルの第1段階「全てのものは何らかの用途を持つ

て生き物と認められる」に該当する。

例えば、水が活着ているのは「ばい菌を落とすから」(6歳)、「うがいをするから」(6歳)、「みんなに飲ませてあげるから」(5歳)、「洗濯をするから」(4歳)であり、時計は「時間を示す」(5歳)から活着ているとされる。雲は「太陽を出す」(4歳)、「夜に月を動かす」(4歳)ので活着ている。このように「活着ている」とは、「何かをする」ことでありそのことが自分にとって有用であるかどうかと強く結びついて解釈される。この時自分とその行為こそがテーマであり行為の原動力に「心」が登場してくるのである。その意味で「心」はその本来的な意味を問われることなく説明概念として重宝される。心とはその内容や機能ましてや構造などに触れずとも使用できる便利な言葉なのである。

次に、同様に第1段階の特徴を示しながらも人と心がほぼ類似の概念として語られた6歳児の例を示す。

〈6歳男児〉

—時計って活着てると思う?—うん、活着てるよ—どうして活着てると思う?—あんなー、時間を教えるため—ぬいぐるみは活着てる?—活着てるよ—どうして?—あんなー、みんなで遊ぶため—水は?—活着てるよ。みんなの手を洗うため—人は活着てる?—うん、活着てるよ。みんなを育てるため

本児にとって「活着ている」とは行為と結びつけられた現象でありそのための因果的説明として「人」が介在する。そしてその「人」は、行為を発現させるために「心」を有している。しかしその関係は混沌として心と人は限りなく類似概念として扱われているのである。

#### (5) 対象の性質とアニミズム思考との関連

対象の性質とアニミズム思考との関係を調べ、それを年齢別にまとめたものがFig. 5～7である。これによると、先ず「自然物」と「人工物」による著しい相違は見られなかったものの5歳でその反応比率が逆転し再び6歳で回復していることが示されている。ここにおいて3歳児とは異なった生物的概念の獲得が6歳児に用意されたと推測される。すなわち、先述したように形態や色、素材などの属性理解による混乱が5歳児の逆転比率をもたらしたわけだが、6歳ではその統合が図られ安定してくるという解釈である。生物と無生物においても4歳で無生物が生物を上回ったがそれ以外は無生物が生物のそれを上回ることは無かった。ここにおいて4歳という年齢が新たな基準を生命概念に導入したことを予測させた。

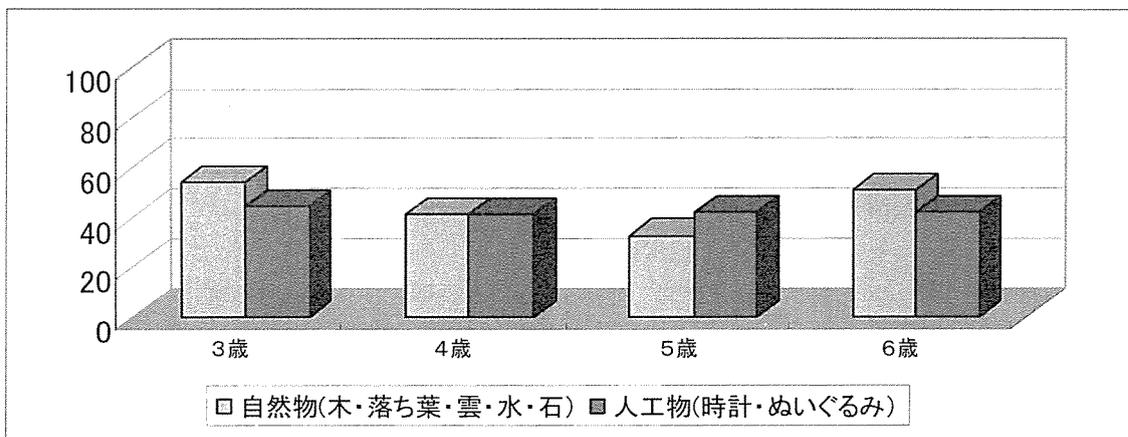


Fig. 5 自然物と人工物の違いによるアニミズム思考の出現頻度(割合)

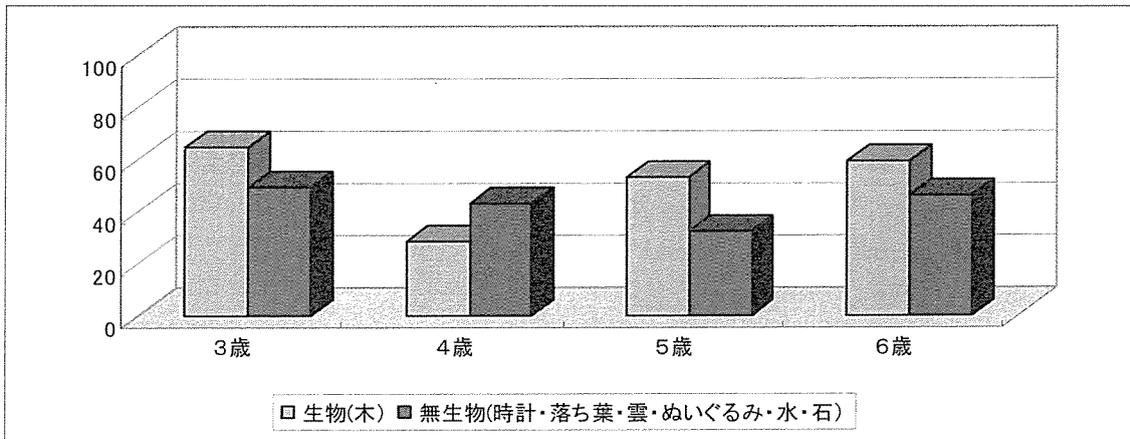


Fig. 6 生物と無生物の違いによるアニミズム思考の出現頻度 (割合)

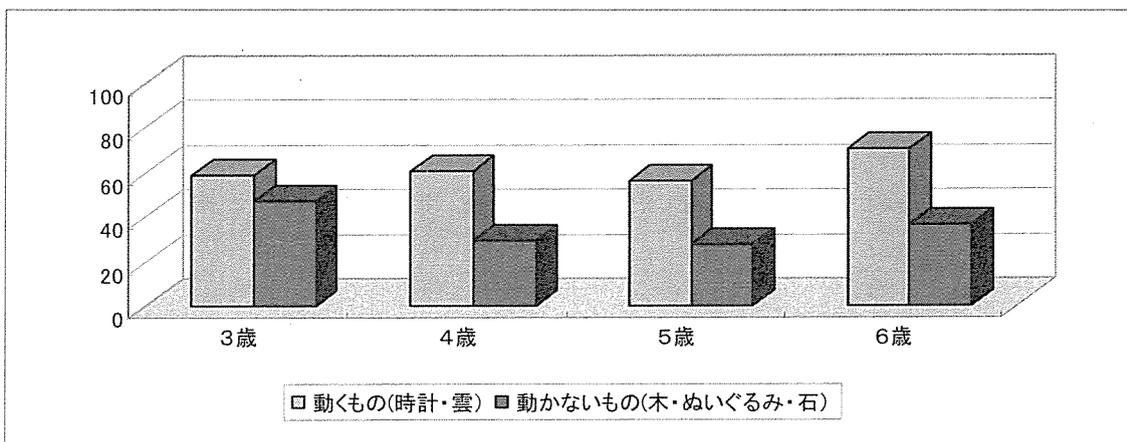


Fig. 7 「動くこと」の有無によるアニミズム思考の出現頻度 (割合)

「動くもの」と「動かないもの」によるアニミズム的思考の出現はFig. 7にも示されている通りどの年齢段階においても「動くもの」が「動かないもの」を上回っていた。また加齢に伴い「動くもの」にアニミズム的思考を当てはめる割合が増えるのに反して「動かないもの」にアニミズム的思考を当てはめない子どもが減少していた。これはPiagetのモデルによれば第2段階の特徴に相当するが4歳～6歳の幼児にこうした傾向が顕著であることが分かった。そして3歳では「動く」ことを「生きている」理由にあげた子どもが少ない (Table 3 参照) ことから3歳は第1段階に相当すると思われる。ところで「動くもの」という判断においても子どもも独特の考えが披露された。例えば「石」が生きている理由について「地震が来たら動く」(6歳), 「転がるから」(4歳) 等の反応が観察されたが、位置が変わることや動かされることも子どもにとっては「動く」という理解を生むことが分かった。しかし「生きているから動く」という論理はいつの間にか転倒して「動くから生きている」という認識を呼ぶ。「地震が来たら動く」石も、動く故に生きており、「風で動く」木は生きている(4歳)。落ち葉は「風に吹かれたら蝶に変わる」(4歳), 「落ちるから」生きている(5歳)。バッタは「ピョーンするとき」には生きており、「跳ばないとき」は生きていない(4歳)。人も「寝ているとき」は生きていない(5歳)などである。

しかしそうした認識も「動くこと」に対する認識の発展すなわち自発的な動きと外部から与えられた運動を区別するようになってくると「生きている」ことの理解を分化させていく。

#### 〈4歳男児〉

一車って生きてる？一生きてない一車は動くけど生きてない？一生きてない。車は人が運転するから一汽車は？一生きてない。人が運転するから（飛行機も同様）一生きてるってどういこと？一命があるってこと一命って何？一体の中にあるもの一太陽は生きてる？一生きてるよ一どうして太陽は生きてるって分かる？一笑ってるから一お月さんは？一生きてる。笑ってるから（星も同様）一太陽が笑ってるの見たことがある？一あるよ。ぴかぴか光ってるでしょ。あれが笑ってるってこと

Piagetは先のモデルにおいてこうした反応が出現されるようになることを第3段階の特徴としているが運動の自発性が「生きていること」の基準となって素朴生物学の原型を獲得していくとは考えられないだろうか。時計について「ただ動くだけ」（3歳）、「電池で動いているだけ」（5歳・6歳）等が「生きていない」理由として取り上げられたが、ただ「動くだけ」では生きていると言えない限界を子ども達はどう認識するのだろうか。それは丁寧な事物の観察と発話体験での自己への見直しから可能となる。例えば「針がいつも回っている」（5歳）から「生きていない」とした子どもはその単調さに自発的な生物の動きとの違いを見出した。また雲は「生きてないけど動いている」という子どもは、雲の動きに対する詳細な観察が推測される。

### 5. 全体的考察

全般的に幼児はアニミズム的思考を根強く持っていることが示された。これはちょうど4～6歳を対象として調べた宮本ら（1967）の結果とも一致する。しかながらその様態については様々でPiaget（1955）が指摘したような科学的概念の未発達から生じる現象として説明することにはなじまなかった。生命という概念が多様に定義されるのと同じように子ども達は多様な視点から「生きている」ことを捉えていたのである。多様性は先ず自他および自己と外界との融即によってもたらされた。これは3歳の子ども達の特徴的な反応より認められた。そしてそれらが分離する過程において様々なアニミズムを登場させる。特に事物の性質や特徴への理解は分離を促進し初期の様態とは異なったアニミズム的思考を表現させた。ほんやりしたアニミズムから事物の特徴を覆ったアニミズムへの発展である。色・性質・動き・素材など事物の様々な特徴はやがて「生命」という概念に集約されるがその過程においては事物認識からの転導や概念の過般化による第2のアニミズムが登場する。Piagetのモデルの第1から第2段階への移行はそうした力によって成し遂げられたと解釈できる。そしてその中でも「動く」という特徴が中心化され「動くことによって生きている」という認識が備わっていくわけだが、本研究においてもその傾向が4歳以降の幼児に顕著に現れた。この時子ども達は事実の忠実な観察と発見という作業に迫られる。第3段階への移行は誰かに「自発的に動かないものは生きていない」と教えられて獲得した認識ではないからだ。子どもは遊びや生活の中での豊かな実体験を通し、一つ一つの対象物に対して「どうやらこれは自分では動いていないようだ」と認識する（分化）。そしてその体験を通して得たものが積み重なることにより、ほかのものにも概念化して当てはめることができるようになっていく（統合）のである。つまり子どもは、曖昧さを十分に含んだ生命観を表現しそれを確かめていく過程において「生きている」ということの実像をつかんでいく。そして6歳前後に動く力の原因への追求が始まり科学的な生物概念す

なわち生命の有限性への認識が獲得されるようになる。しかしここでも生物的概念の獲得が生命観を形成するのではない。すなわち生命の有限性を知ることによる抵抗として子ども達はここで文学的認識の基礎とも言える事物への同一視や投射を行い空想世界を豊かにしていく中でその矛盾を解消しようと努めるのである。

このように順序的にはPiagetのモデルには間違いはないが各段階間の移行において様々な問題が指摘され下位段階を設定して解説することも必要だ。またモデルで示された年齢よりもっと早い段階で子ども達のアニミズム反応が出現したことも指摘しておきたい。

更に初期アニミズムは文字通り事物に人格や人の心を当てはめたものではなかった。それは「同一視」や「投射」の要素も含まれておりそれ故に大人になっても自我意識が生命観を揺らしていくことがあることを考えるならば子ども特有の思考様式としアニミズムを捉えることは危険だろう。

加えて6歳児にも第1段階と思われる理由も見い出され、反対に4歳児でも第3段階に入っていると思われる反応が観察される一方、一人一人の子どもにおいても事物によって異なった思考様式を採用しておりその子自身の発達段階を特定することはかなり困難な作業であると思われた。あるいはそうした作業は余り意味が無いのかもしれない。

総じて素朴生物学の源流としてアニミズムを取り上げることはアニミズム的思考についての捉え方を狭め本質を見失わせる。よって今後は、自己意識の発達を土台としながら、文学的知識と科学的知識の源流として検討していくことがアニミズム研究を発展させる視点となろう。

#### 引用文献

- Baron-Cohen,S (1995) Mind blindness. An Essay on Autism and Theory of Mind. Cambridge, MA: Bradford, MIT Press.
- Carey,S (1985) Conceptual change in childhood. Cambridge,MA:MIT Press.
- Gibson,J (1950) The perception of the visual world Boston : Houghton Mifflin
- 稲垣佳世子 (1995) 生物概念の獲得と変化 風間書房
- Nagy (1948) The child's theories concerning death. Journal of Genetic Psychology, 73,3-27
- 仲村照子 (1994) 子どもの死の概念 発達心理学研究第5巻. 第1号.
- 宮本美沙子, 田部洋子, 吉田薩子, 東洋 (1967) 児童の生命の概念とその手がかりの発達 教育心理学研究15,85-91
- 水谷孝子 (2004) 生と死を語る絵本 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要6,19-32
- 長崎県教育委員会 (2005) 児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査について <http://www.pref.nagasaki.jp/edu/index.php>
- Premack,D (1990) The infant's theory of self-propelled objects. Cognition, 36, 1-16.
- Piaget (1955) 大伴茂訳 ピアジェ臨床児童心理学Ⅱ児童の世界観 同文書院
- Vygotsky, L, S. (1978) Mind in society. Edited and translated by M.Cole, S. Scribner, V.John-Steiner & E. Souberman (Eds.) Cambridge MA: MIT Press.
- Wallon (1983) 浜田寿美男訳 身体・自我・社会 ミネルヴァ書房